令和４年５月２７日 発行　第２７号

伊 達 家
雪 薄 紋

郷　土　の　か　ぜ

仙 台 市 民 図 書 館　郷土資料コーナーから

「100 年前の仙台の情景を考えながら」

郷土資料担当 渡邉 啓市

一人でまち歩きをすることが好きで、毎日のようにちょこちょこと仙台の街を散策していると、日ごとに街路樹の樹々の緑が濃くなってきているのが実感できます。そして、柔らかな日差しがさして、木々の間からは鮮やかに輝く光と緑がよく映え、その風景を見る度、正にここが杜の都なのだと一番に実感できる季節でもあります。

また、そのような道中では、新しくできたおしゃれな雰囲気のお店であったり、新しくできた居心地のよさそうなカフェであったり、いつも新たな発見があるものですが、仙台の街を歩いて気づくことは、街路樹のある幅広い大通りがとても多いことだと思います。

これらの大通りは、太平洋戦争の戦災により焼け野原となった街の復興事業として、戦後、新たに計画され「青葉通り」「広瀬通り」「東二番丁通り」などの幹線道路が整備されたと聞きます。そんな広い通りを歩いていると、戦前の頃の街の情景はどのようなものであったのか気になります。

図書館がある「せんだいメディアテーク」近くを見ても、現在は「晩翠通り」と呼ばれる広い通りは、ひと昔前の世代にとっては、「細横丁」と言ったほうがわかる方が多いと思いますが、逆に若い世代からは、細横丁と聞いてもピンとこない方もいるかと思います。

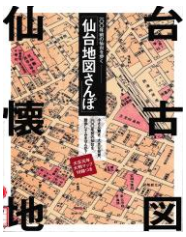
この細横丁、戦前は市電が通るでもなく、軍用道路として活用されるわけでもなく、戦後の復興事業によって幅広い幹線道路となるまでは、その名のとおり細い通りだったようです。郷土史家、三原良吉氏が著した「郷土史仙臺耳ぶくろ」によると『大町から北五番丁につきあたるむかしの細横丁は、長さ一キロ半に及ぶ仙台一狭くて長い名物横丁で。･･･』とあり、さらには『むかしの細横丁は大半が竹ヤブや木立の繁る侍屋敷の横と横が狭い道をはさんで向かいあうさびしい小路で、手マリ唄にも「一つとや人もとおらぬ細横丁、ゆうれい（幽霊）化け物出る横丁」だった』との記述がありました。

そのような昔の街を想像しながら、現在ブームの古地図を片手にまち散歩ではないですが、「イーピー風の時編集部」が発行した「100 年前の仙台を歩く　仙台地図散歩」を持って、現在と比較しながら散策されるのはいかがでしょうか。

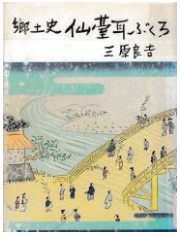
<参考図書>

『100 年前の仙台を歩く 仙台地図さんぽ』イーピー風の時編集部／編　S29.9セ

※　発行元の「イーピー風の時編集部」によると、年内に現在発行されているものより、より「まち歩き」しやすいような地図に変わるとともに各ページの解説文も加筆・修正されるそうです。



『郷土史仙臺耳ぶくろ』三原良吉／著　S20.4ミ



■ある日のレファレンスから

仙台といえば、伊達政宗公の騎馬像を思い浮かべる方が多いと思います。テレビの旅番組等で仙台が紹介されると必ずと言っていいほど、最初に騎馬像がアップで映し出され、言わば仙台のシンボルのような存在ではないでしょうか。

もちろん、当館に来る数あるレファレンスの中でも、伊達政宗公に関する質問とともに青葉城趾にある伊達政宗騎馬像の質問もよく出ます。

それも、現在の騎馬像に関することだけでなく、初代の騎馬像が設置された経緯や騎馬像の製作者である小室達氏についての質問など、多岐にわたっております。中でも「土井晩翠が伊達政宗公騎馬像の除幕式の際に朗読した歌は何か」といった質問は、どの資料から探したらよいのかわからず、回答するのに大変苦労したレファレンスもありました。

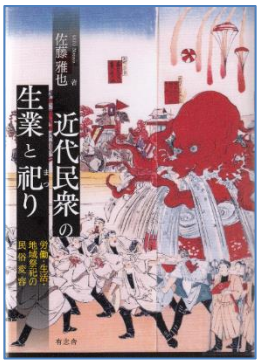
その騎馬像も、今年３月の地震の影響により像が傾いてしまったというニュースは大変衝撃的でした。

伝え聞くところによると、損傷が激しく現地での作業を断念し、専門業者に運んで修復するそうで、来年春の公開を目指すそうです。これから観光シーズンを迎え、とても残念なのですが、早く仙台のシンボルとして復活してほしいものです。

■新着図書紹介（郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書）

『近代民衆の生業と祀り　労働・生活・地域祭祀の民俗変容』

佐藤 雅也／著 有志舎 S31 サ

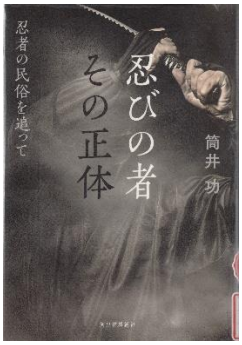


歴民（仙台市歴史民俗資料館）学芸員の佐藤雅也さんが、これまで取り組まれた民俗学研究の成果をまとめ上げられました。

戊辰戦争以降、近代へと時代が移行する中で、民衆の生活・労働・信仰などがどのように変容していったのか、歴民の貴重な資料をはじめとする民俗学資料をひもときます。東北の仙台地域を主な舞台として論じ、伝統社会から近代社会へと移り変わっていく歴史を民衆の視点から明らかにします。序章で語られる「史実ではなく「歴史ものがたり」になってしまう恐れ」を打ち消すかのように巻末に多数の参考文献が裏付けとしてあげられています。佐藤さんの調査の足跡をたどるように参考文献にも目を通してみたいと思いました。

『忍びの者　その正体　忍者の民俗を追って』

筒井 功／著 河出書房新社 S78 ツ



伊達政宗によって組織された「黒脛巾組（くろはばきぐみ）」をご存じでしょうか？黒脛巾組は北条氏配下の忍び「風間一党」と並ぶほど著名な戦国期の忍びの集団です。仙台藩士・半田道時の「伊達秘艦」に、1585（天正13）年の人取橋の合戦での動きが記されています。果たして彼らはどんな役割を担った集団なのか。

その他にも、著者が忍びを調査するきっかけとなった植田次兵衛や風間一党、忍者といえばの伊賀・甲賀の忍びとはどんな集団だったのか、さまざまな文献や各地で取材した言い伝えをもとに、忍びの者の実像に迫ります。

■編集後記■　今年は宮城県の県制 150 周年だそうです。県によると、今年９月いっぱいまで「150 周年記念観光キャンペーン」を行う予定だそうですが、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着きを見せている今、県内の観光地をゆっくり散策するのも良いかもしれません。

発 行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー
所在地：仙台市青葉区春日町2－1せんだいメディアテーク内 TEL：022-261-1585